

【世界の中の石州銀】

16世紀の日本では、戦国大名による鉱山開発が盛んに行われました。なかでも石見銀山（島根県大田市）は精錬技術「灰吹法」の導入などを契機として、各地の鉱山開発のさきがけとなりました。

●世界地図と石見銀山

16～17世紀にかけて、中国やヨーロッパ諸国での銀使用の増大を背景に、石見で産出された銀は海外へ輸出されました。17世紀に、日本の銀として世界に知られた「ソーマ銀」（佐摩銀）は、石見銀山の一带の地名「佐摩村」に由来すると考えられます。

◆日本の銀山が記された「タルタリア図」

タルタリア（シベリア地方）中心の地図の右下に描かれた日本に「Minas de plata」（銀鉱山）と記されています。日本が銀の産出国として知られていたことがわかります。



拡大図

タルタリア図は、フランドル（現在のベルギー）の地図学者アブラハム・オルテリウスが出版した地図帳『地球の舞台』（1570年初版）に収録されています。1595年版『地球の舞台』にはティセラからオルテリウスに贈られた「ティセラ日本図」も収録されました。

タルタリア図
オルテリウス作 1570年初版
(島根県立古代出雲歴史博物館蔵)

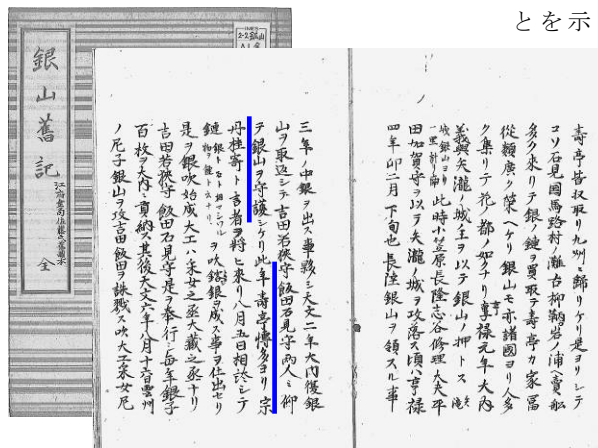
●石見銀山と石州銀の登場

石見銀山の発見の経緯や沿革を記した『銀山旧記』によると、1526（大永6）年に博多の商人神谷寿禎が石見銀山を発見し、寿禎に招かれた宗丹と桂寿によって銀の精錬方法「灰吹法」が伝えられました。



『石見国銀山旧記』

江戸時代



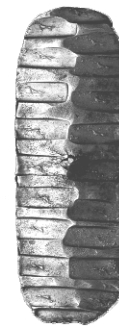
『銀山旧記』

江戸時代

●石州銀の特徴

【使用方法】石州銀は、重量が一定でなかったため、使用する際に重さを計り、また必要な重さに切って使用されました。

【形状】石州銀の表面は、文字の無い長方形の極印を左右に打って、石州銀であることを示しています。



石州銀

16世紀

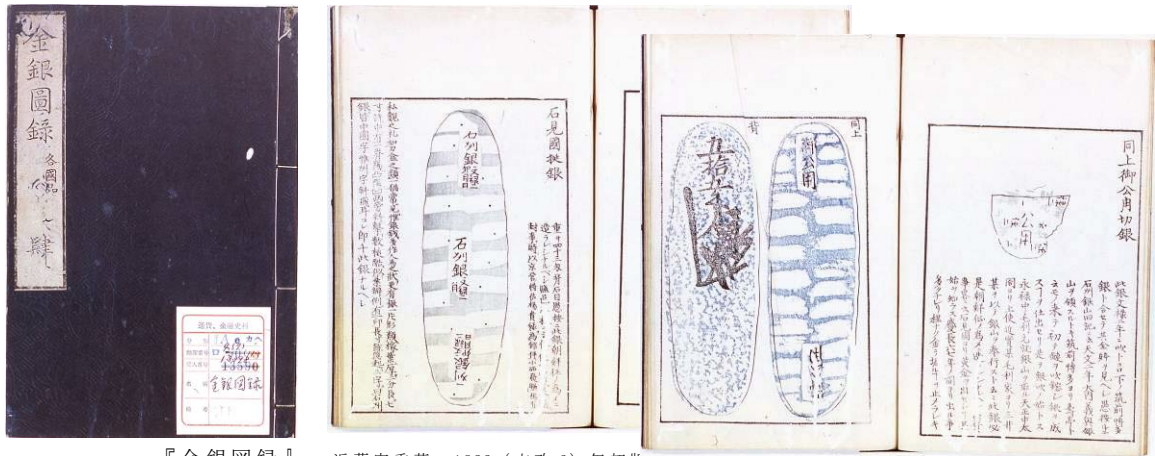
極印とは・・・？

銀の品質が山やっ製造地により異なるため、極印を打つことでその品質を証明しました。

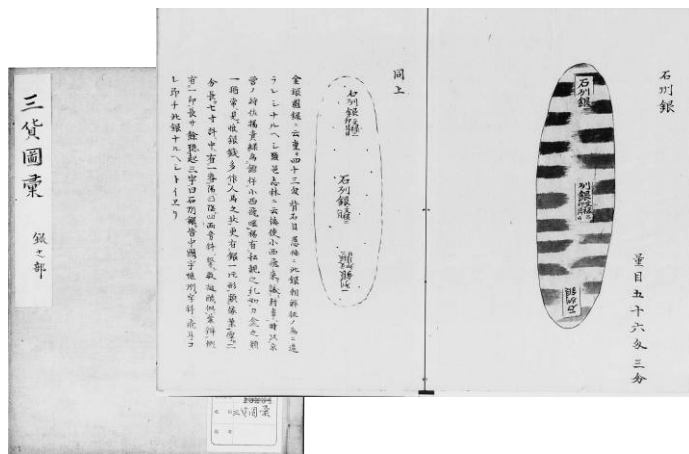
全面に規則的に打たれた長方形の極印。極印には識別に使ったと考えられる文様があります。

●史料に見る石州銀

江戸時代に著された貨幣の図鑑『金銀図録』『三貨図彙』には、「石見国挺銀」「石州銀」として「石州銀文禄二卯月日」(1593年)の極印を持つものが記載されています。豊臣秀吉による文禄の役の時期に当たり、軍用としてつくられたことが史料には記されています。



『金銀図録』 近藤守重著 1823(文政6)年初版
明和期(1764~1772)までの日本の金銀貨550点を収録した図録。



『三貨図彙』 草間直方著 1815(文化12)年初版
江戸時代の代表的な貨幣誌。



極印の拡大

文禄石州銀

『金銀図録』『三貨図彙』の図と同様で、丸い点のある長方形の極印が左右交互に打たれ、中央に「石州銀文禄二卯月日」の極印が6個打たれています。

「萩判銀」と記された石州銀

山口県内で発見された無文銀は「萩丁銀」「萩判銀」と呼ばれています。毛利家所有の石州銀のなかに1570(元亀元)年の墨書を持つものが含まれることから、この時期につくられたものと考えられます。



石州銀(萩判銀)

長方形の極印は他の石州銀よりも、やや平坦です。

切遣いされた石州銀

『銀山旧記』には、「当時通用銀は悉く切銀にして使っている」とあります。また、宣教師ルイス・フロイス(1563年来日)は『日本覚書』に「日本では切片の重さを計って通用している」と記しており、秤量貨幣として使用された様子がわかります。



御公用銀

石州銀の切片です。長方形と「御公用」の極印が複数打たれ、切片でも使われていたと考えられます。石見銀山を領有していた毛利氏が天正年間(1573~1591)につくらせたものと考えられます。

【武田氏ゆかりの金貨－甲州金－】

武田氏は領国内の金山開発を進め、産出した豊富な金を使用して、甲州金と呼ばれる金貨をつくり、流通させました。

●甲州金とは？

甲州金は、戦国大名武田氏の領国内で産出する豊富な金を使用してつくられるようになった金貨です。江戸幕府が貨幣制度を統一した後も例外的に甲斐（現在の山梨県）での使用が許されました。

◆古甲金と新甲金

甲州金には、戦国時代から江戸時代の享保年間（1716～1736）までにつくられた古甲金と、享保年間以降につくられた新甲金があります。



古甲金
露一両金



新甲金
甲重二朱金

◆史料にみる武田氏時代の甲州金



『金銀図録』に記された「碁石金」

武田信玄と甲州金の関わりは、江戸初期に集成された甲州流の軍学書『甲陽軍鑑』によって印象づけられています。ただ、武田氏と甲州金製造を直接結び付ける史料は確認されていません。

◆甲州金の製造に関わった人々

甲州には、金を採掘する金山衆のほか、さまざまな専門的技術をもった人々がいました。

甲州金の製造

金の品位が高い甲州金（81～83%）をつくるためには、金の精錬や品位の鑑定技術などが必要であり、これが甲州金の信用の裏づけとなっていました。

天正年間頃（1573～）から甲州金の製造には、松木・野中・志村・山下の4氏が関わっていたとされています。4氏のうち、松木氏と野中氏については史料上で実在が確認されていますが、志村氏と山下氏については甲州金の極印から確認できるのみです。

《甲州金製造にたずさわった4氏》



松木一分金 野中一分金 志村一分金 山下一分金

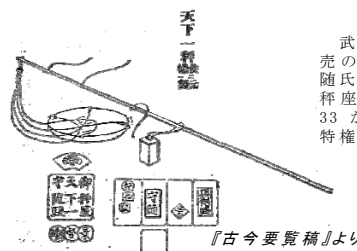
4氏のうち、松木氏が江戸幕府から甲州金製造の独占権を与えられました。

甲州金と秤

額面に「小糸目」（約0.1g）「小糸目中」（約0.06g）といった小さな貨幣単位が表示された甲州金を作るためには、重さを正確に計測する技術も必要でした。

武田氏は、1574（天正2）年、吉川茂濟（守随家初代）に対し、甲州での秤の製造と販売の独占権を与えました。甲州では、円滑な取引のために重量の単位や秤の規格を統一する必要がありました。

《秤の特権を与えられた守随氏》



武田氏から秤の製造と販売の独占権を与えられた守随氏は、その後、江戸幕府の秤座に取り立てられ、東国33か国の秤の製造・販売の特権を与えられました。

『古今要覧稿』より

●いろいろな甲州金

16世紀後半～江戸時代初期頃と推定される甲州金には、碁石、円形、四角の形状のものがあり、一つ一つに額面を表わす極印が打たれています。額面は、「両」「分」「朱」のほかに、その下の「糸目」「小糸目」といった単位や、「三朱」や「二分一朱」などの端数を持つものもありました。



一分朱中糸目金



角一分金



吉一分金

● 甲州金の貨幣単位

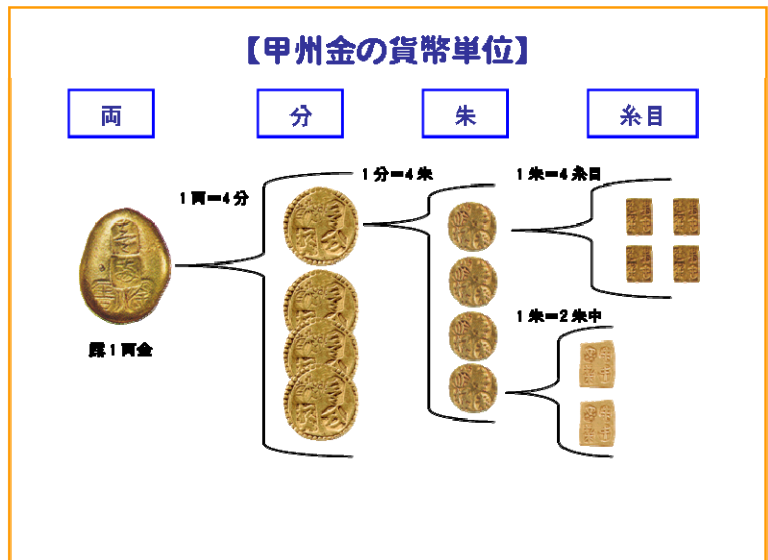
甲州金は、4進法の貨幣単位を採用した貨幣です。甲州金の「両」「分」「朱」という貨幣単位は、徳川家康により江戸時代の金貨の単位として受け継がれました。

甲州金の1両 = 金4匁 (15g)

(田舎目の場合) 金4.2匁 (15.75g)

1両 = 4分 = 16朱 = 32朱中 = 64糸目

「朱中」未満の貨幣単位として、「糸目 (朱中の1/2)」、「小糸目 (朱中の1/4)」、「小糸目中 (朱中の1/8)」がありました。



【甲州金の歩み】

	主なできごと	年代	甲州の主なできごと
室町時代 (戦国時代) 安土桃山時代	室町幕府滅亡	16世紀中頃 1573(天正1)	武田氏が領有 ・甲州の諸金山が開発 ・「甲州金」の本格的な鑄造・発行
	徳川家康、「関ヶ原の戦い」で勝利	1582(天正10) 1590(天正18) 1591(天正19) 1593(文禄2) 1600(慶長5)	武田信玄没 武田氏滅亡 徳川家康、甲州領有 豊臣秀勝が領有 加藤光泰が領有 浅野長政が領有 甲州、徳川氏の直轄領となる
	徳川家康、統一貨幣「慶長金銀」を発行	1601(慶長6)	→ 甲州金、鑄造停止 一 甲州は、享保期まで幕府直轄領と大名支配を繰り返す
	徳川家康が江戸幕府を開く	1603(慶長8) 1608(慶長13)頃 : :	甲州金、鑄造を再開 幕府、甲州金を元禄金へ引き替えることを指示 領内では甲州金存続願い → 幕府、元禄金への引き替えを一時猶予
	元禄の改鑄【初の金銀貨幣改鑄】 全国在来の地方金銀貨の通用を停止 →元禄金銀への引き替えを指示	1695(元禄8) 1696(元禄9)	幕府老中・柳沢吉保が川越から甲州へ移封となる
	正徳の金銀貨改鑄	1704(宝永1) 1706(宝永3) : : 1709(宝永6) 1714(正徳4) 1721(享保6)	甲州金、元禄金に準じて改鑄することで存続が許可される →「甲安金」の鑄造・発行(宝永4年)<金の品位:約61%> 吉保の子・柳沢吉里が領主となる
		1724(享保9)	正徳改鑄 →「甲重金」の鑄造・発行<金の品位:約75%>
		1727(享保12)	領主・柳沢吉里の移封に伴い甲州が幕府直轄になる →「甲重金」、鑄造停止
		1732(享保17)	領内は金貨不足、幕府への増鑄願い →「甲定金」の鑄造・発行<金の品位:約72%> 「甲定金」、鑄造停止 一 以後、甲州金の改鑄・増鑄はされなくなる

【石州銀の計測データ】

凡例

当館で所蔵する石州銀 9 点のデータ（縦・横・厚・重量）を掲載（口絵 6.7、39 頁「石州銀 図版」参照）。掲載するデータは次のとおり。

（1）番号

分類保管番号

（2）縦・横・厚・重量

縦・横・厚の計測については、電子ノギス（ABS ソーラ式デジマチックキャリパ 500-445〈最小表示量 0.01mm, 株式会社ミットヨ製〉）を使用した。なお、縦・横・厚の数値は、1 箇所につき 2 回測定を行い、その測定値の平均値の小数点第三位を四捨五入した値とした。

重量の計測については、電子はかり（音叉式多機能電子はかり HG2000〈最小表示単位 0.01g, 新光電子株式会社製〉）を使用した。

測定は 1 名で行った。

No	番号	大きさ			重量	口絵カラー
		縦	横	厚		
1	ⅡAカマc1(1)	68.64	35.58	3.99	54.66	口絵6-1
2	ⅡAカマc1(2)	116.39	42.53	5.24	144.10	なし
3	ⅡAカマc1(3)	108.58	46.32	5.23	167.24	口絵6-2
4	ⅡAカマc1(4)	98.27	46.00	6.51	167.68	口絵6-3
5	ⅡAカマc1(5)	158.73	54.61	6.72	371.72	口絵6-4
6	ⅡAカマc1(6)	121.20	56.14	5.64	164.66	口絵7-5
7	ⅡAカマc1(7)	124.69	59.16	4.10	167.54	口絵7-7
8	ⅡAカマc1(8)	110.98	54.28	4.71	154.78	口絵7-6
9	ⅡAカマc1(9)	72.53	42.11	5.34	94.22	口絵7-8

* 表の単位は、大きさ mm、重量 g

【甲州金（古甲金）資料概要】

（『図録日本の貨幣 1』311 頁 表「日本銀行所蔵の古甲金」より作成）

No	名称	数量	大きさ	重量	品位	形状	表の極印
1	露一両金	5	1.8~1.9	14.7~15.3	81~83	碁石形	金、吉、壹両
2	〃	6	1.6	15.0~15.2	〃	〃	桐、松木、壹両
3	駒露金	1	1.8	15.5	〃	〃	馬の絵
4	二分一朱金	1	2.4	8.8	〃	〃	金、吉、貳分壹朱
5	角二分金	2	3.0×2.7	7.7~7.9	〃	長方形	吉、貳分
6	角一分金	1	1.2×2.0	4.0	〃	〃	金、吉、壹分
7	吉一分金	1	1.6	4.1	〃	円形	吉、壹分
8	二朱中糸目金	3	1.4~1.7	2.5~2.8	〃	〃	吉、貳朱中糸目
9	角二朱金	2	1.8×0.9	1.9	〃	長方形	ア、ホ、金貳朱
10	一分朱中糸目金	2	2.2×2.8	4.4~4.9	〃	円形	甲、壹分朱中糸目（裏に「国」の字）
11	甲一分金	2	1.5	4.0	〃	〃	甲、壹分
12	二朱中小糸目金	1	1.7	2.5	〃	〃	貳朱中小糸目
13	松木二分金	2	1.8~1.9	7.0~7.5	〃	〃	松木、貳分
14	松木一分二朱金	1	1.6	5.0	〃	〃	壹分貳朱
15	松木一分一朱金	1	1.8	4.8	〃	〃	桐、松木、壹分壹朱（裏に桐文）
16	松木一分金	9	1.4~1.7	3.7~4.0	〃	〃	桐、松木、壹分
17	野中一分金	2	1.6	3.6~3.7	〃	〃	野中、壹分
18	志村一分金	1	2.6	3.6	〃	〃	志村、壹分
19	山下一分金	3	1.4~1.6	3.8~4.1	〃	〃	山下、壹分
20	松木三朱金	1	2.3	1.8	〃	〃	松木、三朱
21	松木二朱金	2	1.2~1.3	1.9	〃	〃	松木、貳朱
22	松木一分金	51	1.5~1.7	3.7~3.8	〃	〃	桐、松木、壹分
23	松木二朱金	20	1.2~1.3	1.9	〃	〃	桐、松木、貳朱
24	松木一朱金	20	1.1~1.2	0.9~1.0	〃	〃	桐、松木、壹朱
25	松木朱中金	6	1.1	0.4~0.5	〃	〃	桐、松木、朱中
26	松木角朱中金	2	0.8×0.6	0.4	〃	長方形	桐、松木、朱中
27	松木糸目金	1	0.8×0.5	0.2	〃	〃	桐、松木、糸目

* 表の単位は、大きさ cm、重量 g、品位 %

【石州銀 図版】(原寸の70%)



【16世紀につくられた金貨・銀貨】

16世紀、石見銀山をはじめとする国内各地の鉱山では、戦国大名が先を争って金銀を採掘しました。石州銀、甲州金以外の16世紀につくられた金銀貨をご紹介します。

●さまざまな金貨



蛭藻金

ヒルムシロとよばれる植物に形が似ていることから、蛭藻金と呼ばれています。

山内一豊の妻が貯めていた金貨で馬を買い、一豊が出世するというエピソードがありますが、ここに登場する金貨は、こうした楕円の形状のものであったと考えられます。



讓葉金

蛭藻金より大きく、表面全体にタガネ目が施されています。



天正大判（天正菱大判）

豊臣秀吉が彫金師の後藤家につくらせた最初の大判です



天正越座金

越後上杉氏の領国貨幣といわれ、「扇に菊桐」「天正」「越座」の極印が打たれています。



(表)

(裏)

円歩金

表の中央に「桐」、裏の中央に「花押」の極印が打たれています。

●さまざまな銀貨

永楽通宝

(左：金銭) (右：銀銭)



天正通宝

(左：金銭) (右：銀銭)



筑前博多御公用銀

「文禄二中山与左衛門」の文字のある長方形の極印が左右に、「博多御公用」の極印が中央3ヶ所に打たれています。



山口天又銀

文字の無い長方形の極印を全面に打ち、上下左右5ヶ所に「山口天又(花押)」の極印が打たれています。